

第一章…湯けむりの向こう側にある、隠れ里への誘い

「……ふふ。紅葉（もみじ）染まりし隠れ里の宿……なんだか、世界の理（ことわり）から切り離された結界の中にいるみたいですね」

山間の静寂に包まれた温泉街。石畳の坂道を並んで歩いていると、隣を歩く千夜が、うつとりとした様子で呟いた。老舗旅館が立ち並ぶこの場所は、確かに日常の喧騒を忘れさせる独特の風情がある。

「ほら、見てください。あそこから立ち上る湯気……まるで地底の龍が深呼吸をしているようではありませんか？」

千夜が袖を口元に当てて、上品に笑う。相変わらずの発想だ。

「あ、あそこにお饅頭屋さんが……『灼熱のマグマ包み・大地の怒り』……」
「いや、ただの『温泉まんじゅう』って書いてあるけど」

「ふふ、そう書いて『マグマつつみ』と読むのですよ。……ねえ、私の言ってること、分かりますよね？」

千夜が期待に満ちた瞳でこちらを見上げてくる。

「……まあ、出来立てで熱そうって意味なら分かるよ」

「正解です。さすが、言わんとすることを瞬時に理解してくれますね。以心伝心、魂の共鳴を感じます」

嬉しそうに破顔する千夜。彼女は俺のことを代名詞で呼ばない。ただ視線を絡ませ、距離を詰め、言葉を直接届けてくる。それが、名前を呼ばれるよりも深いところで繋がっているような心地よさだった。

予約していた旅館『月読（つくよみ）の宿』に到着し、通されたのは離れにある特別室だっ

た。和の趣を凝らした広い部屋。窓の外には専用の露天風呂も見え、鮮やかな紅葉が広がっている。

「わあ……素敵。まるで古の姫君が幽閉……いえ、忍び逢うための隠れ家のように」

千夜は荷物を置くと、畳の上を滑るように窓辺へ向かった。和柄を取り入れたロングスカートに、ふんわりとしたニット。

「……ん？ どうしました？ さつきから、熱心な視線を感じますが」

千夜がぐるりと振り返り、小首を傾げる。

「い、いや。部屋も広いし、ゆっくりできそうだなと思って」

「ふふ、そうですね。誰も見ていませんし、誰にも邪魔されません。……ここでは、どんなに甘やかしても、甘やかされても、許される場所ですから」



彼女は意味深に微笑むと、持参した風呂敷包みをテーブルの上に広げた。

「一息つく前に、お茶を淹れますね。甘兎庵の新作試作品を持ってきたんです」
「試作品？」

「はい。名付けて——『禁断の果実がもたらす、エテンの園の崩壊と再生』です」
ゴクリ、と喉が鳴る。名前が不穏すぎる。

「……ちなみに、中身は？」

「栗羊羹です」

「名前の壮大さと実物のギャップがすごいな」

「ただの栗羊羹ではありませんよ。実はこれ、三つのうち一つだけ、とびきりの『刺激』が隠されているんです」

「刺激って……まさかワサビ？」

「いいえ。ここは甘美な空間ですからね。……激辛ハバネロペーストです」

「甘美の欠片もない！」

「ふふ、冗談です。……本当は、一つだけ『特製ブランデー漬けマロングラッセ』が入っているんですよ。当たりを引いたら、とろけるような甘さに酔いしれてしまうかも」

「まさか。そんな意地悪しませんよ。……さあ、召し上がれ？」

俺たちは向かい合って座り、お茶を啜りながら羊羹を口にした。

「……どうやら、普通の方だったみたいだ」

「あら。……んっ……」

見ると、千夜が頬をほんのりと赤らめ、口元を手で覆っている。

「……ふふ。どうやら、当たりを引いてしまったのは私みたいですね」

「千夜が引いたのか」

「はい……ん、すごく……濃厚です。お酒の香りが、鼻の奥をくすぐって……なんだか、こ



れだけで身体が熱くなってしまいそう」

彼女は潤んだ瞳で、じっとこちらを見つめてくる。

「……責任、取ってくださいね？」

「え？ 何の？」

「私がこんなに酔ってしまったのは、このお菓子を選んだ……運命の共有者である、目の前の人のせいでもあるのですから」

千夜はテーブル越しに身を乗り出し、俺の手の甲に、自身の白く柔らかな手を重ねた。その熱が、これから始まる夜の予感を告げているようだった。

—————

お茶請けを楽しんだ後、夕食の前にひとつ風呂浴びようという話になった。



「では、着替えましょうか」

千夜が立ち上がり、備え付けの浴衣を手取る。ふと気づくと、千夜が衝立（ついたて）の向こうではなく、部屋の真ん中で着替え始めようとしていた。

「えっ、ちょっつ、千夜!？」

「……? 何か不都合でも？」

彼女はニットの裾に手を掛けたまま、不思議そうに瞬きをする。

「いや、不都合っていうか、丸見えだよ」

「ふふ。……今さら、何を恥ずかしがることがあるんですか? これから温泉で、もっと……その、深いところまで触れ合うことになるのに」

千夜は少し恥じらいを含みつつも、どこか楽しんでいるように、ゆっくりと服を脱いでいく。



ニットが持ち上げられ、白い肌が露わになる。ふわりと甘い香りが漂った。露わになったのは、黒いレースの繊細なランジェリー。そして、その布面積の少なさを嘲笑うかのような、圧倒的なポリウーム感。

「……っ」

思わず息を呑む。豊かな胸は、重力に逆らいながらも柔らかかくたわみ、深い谷間を作っている。

「……あまり、じろじろ見られると……さすがに少し、恥ずかしいです」

千夜が顔を赤らめ、腕で胸元を隠すような仕草をする。

「ご、ごめん。つい……綺麗すぎて」

「……綺麗、ですか？」



「ああ。本当に」

「……ふふ。お世辞でも嬉しいです。でも……その言葉、あとでもっと聞かせてくださいね」

彼女は満足そうに微笑むと、手際よく浴衣を羽織った。

「……よいしょ。……あれ？」

帯を結ぼうとして、千夜の手が止まる。

「どうした？」

「いえ、その……少し、帯がきつくて。最近、試作の味見をしすぎたせいかしら……」

「手伝おうか？」

「……はい。お願いします」

俺は千夜の背後に回り、帯の両端を掴む。彼女の背中が、俺の胸に触れるか触れないかの距離にある。うなじの後れ毛が、白く透き通るような首筋にかかっている、どうしようも

なく艶っぽい。

「じゃあ、少し締めるぞ」

「はい……んっ……」

帯を引くと、千夜が小さく艶めかしい声を漏らした。

「く、苦しくないか？」

「いえ……ちょうどいいです。……背中、暖かいですね」

千夜が、こっんと俺の胸に後頭部を預けてきた。浴衣越しに、彼女の柔らかい背中の感触と、高めの体温が伝わってくる。

「……このまま、二人で溶けてしまいたいそうです」

「まだ温泉に入っていないの？」

「温泉よりも……もっと熱いものが、ここにはありますから」

彼女は俺の手を上から握り、帯の上からお腹のあたりへと誘導する。トクトクト、彼女の鼓動が指先から伝わってきた。

「……早く、温泉に行きましょう。そして……綺麗にしてから、たくさん可愛がってくださいね？」

千夜は振り返り、潤んだ瞳で見上げてくる。その表情は、男を惑わす小悪魔の顔も混じっていた。

「ああ……行こうか」

俺たちは部屋を出る。廊下を歩く二人の手は、自然と恋人繋ぎになっていた。これからの甘美な時間を予感させ、永遠のように長く、そしてもどかしく感じた。

第二章…湯霧に溶ける白磁の肌と、甘く危険な果実の誘惑



「……ふふ。ここが『天女が羽衣を脱ぎ捨てし、泡沫（うたかた）の秘湯』……ですね」

案内された貸切の露天風呂は、まさに秘湯と呼ぶにふさわしい風情があった。乳白色の湯がこんこんと湧き出ている。立ち上る湯気が視界を白く染め、外の世界から完全に隔絶された二人だけの空間を作り出していた。

脱衣所で浴衣を脱ぎ捨てた私たちは、一糸まとぬ姿で湯気の中へと足を踏み入れる。少し前を歩く千夜の背中は、白く、滑らかに、湯気越しても目が眩むほどに美しい。

彼女が振り返る。

「……あら。また見ていますね？」

千夜は隠す様子もなく、堂々とその肢体をさらけ出した。黒髪を頭の上でまとめ上げ、うなじから背中、そして腰にかけての曲線美があらわになっている。

「ふふ……隠さないのか、って顔をしています」

彼女は一步、こちらに近づく。湯船に浸かる前、洗い場の椅子に腰掛けた彼女は、自身の豊かな胸を両手でそっと持ち上げるようにして微笑んだ。

「隠す必要なんてありませんもの。……だって、これが好きでしよう？」

ドキリとした。

「この『たわわに実りすぎた白桃』……いえ、『聖なる山脈』とても名付けましようか。……重くて肩が凝るのが悩みですけど、そんなに熱い視線で愛でてくれるなら……私、この身体でよかったですから思っています」

千夜は熱っぽい瞳でこちらを見つめながら、自身の胸を愛おしそうに撫でた。その指先が白い肌に沈み込む様子は、見てはいけないうるような背徳感を煽る。

「……さあ、早く。身体を清めてくださいませんか？ 甘兔庵の看板娘としてついた俗世の垢を……その手で、優しく」

—————

俺たちは洗い場に並び、互いの身体を洗い合うことにした。泡立てたスポンジを手に取り、千夜の背中に触れる。

「んっ……ふう……」

背中を滑らせただけで、千夜の口から甘い吐息が漏れる。その声は、静かな浴場に反響して、俺の理性をじわじわと削っていく。

「……そこ、気持ちいいです……。手、大きくて温かくて……。まるで魔法みたい」



彼女は身体を預けるようにして、俺の方に体重をかけてくる。背中を洗い終え、前へと手を回す。必然的に、その豊かな胸に触れることになる。

「……………んっ、あ……………」

指先がふわりと柔らかい感触を捉えた瞬間、千夜の身体がビクリと震えた。手に余るほどのポリューム。泡まみれの俺の手が、その白い山脈を包み込む。

「……………ふふ、もつと……………いいですよ？ 遠慮なんてしないで……………」

千夜が俺の手を上から押さえつけ、さらに深く密着させる。

「触れられると……………身体の芯が痺れて、とろけてしまいそう……………。ねえ、私の心臓の音……………聞こえますか？」

掌を通して、彼女の早鐘のような鼓動が伝わってくる。千夜は上気した顔で振り返り、潤

んだ瞳で俺を見上げる。

「……私、今……すごく、変な気分です。洗われているだけなのに……頭がぼーっとして、もっと……もっと触れてほしいって、身体が勝手に……」

彼女の吐息が、俺の首筋にかかる。甘く、湿った、情欲を含んだ吐息。

「……きれいにして。隅々まで……私の全てを、自分色に染めて……」

その言葉は、理性のタガを外すための呪文のようだった。

—————

身体を流し終え、二人で湯船に浸かる。千夜は迷わず俺の隣に座り、びったりと身を寄せた。



「……はあ……。極楽、ですね」

お湯の中で、肌と肌が触れ合う。浮力のおかげで、彼女の豊満な胸が俺の二の腕に柔らかく押し付けられている。

「……ねえ。私、少し酔ってしまっただみたい」

千夜が、とろんとした瞳でこちらを見つめる。

「……顔、赤いですよ？」

「千夜もな」

「ふふ……お揃いですね」

彼女は嬉しそうに笑うと、湯の中で俺の手を取り、自身の胸へと導いた。お湯の抵抗を感じながら、その柔らかな塊に触れる。



「……………んっ……………あ……………」

千夜が首を反らし、艶めかしい声をあげる。

「……………もつと、いじめてください。この『わがままな双丘』を……………その手で、騾（しつ）けて……………」

指先で先端を掠めると、彼女はビクンと背筋を跳ねさせ、しがみついてきた。

「あつ……………！ だめ、そこは……………っ……………電気が走ったみたい……………」

千夜の腕が俺の首に回される。太ももが触れ合い、彼女の熱い吐息が耳元にかかる。

「……………もう、我慢できません」

千夜が耳元で囁く。



「温泉もいいですけど……私、もつと……深いところまで溶け合いたい。……お部屋に、戻りましょう？」

その誘いに、俺は頷くしかなかった。湯から上がり、バスタオルを身体に巻く彼女の姿は、湯上りの火照りも相まって、この世のものとは思えないほど色香に満ちていた。

第三章…甘美なる夜の帳（とばり）と、溢れ出す愛の雫

「……ふふ。まるで『愛し合う二つの魂を包み込む、白き繭（まゆ）』……ですわね」

部屋に戻ると、雪洞（ぼんぼり）のような柔らかな明かりだけが灯る室内で、千夜が布団を見つめて呟く。その声は震えていた。

「……んっ……ふふ。やっぱりお水なんていりませんわね。……潤してくれるなら」

千夜が上目遣いで誘うように微笑む。俺はたまらず、その唇を塞いだ。

「んっ……ちゅ……っ……」

触れた瞬間、千夜の口から甘い吐息が漏れる。柔らかく、熱い感触。舌を絡め合わせると、千夜の身体がビクンと跳ねた。

「んむ……あ……ちゅぶ、ん……っ」

「はあ……んっ、くちゅ……ふう……っ」

唇を離すと、千夜は荒い息を吐きながら、熱っぽい瞳で俺を見つめている。

「……すごい……。キス……魂ごと吸い取られそうで……頭が、真っ白に……」

彼女は俺の首に腕を回し、再び唇を求めてくる。二人の身体は自然と布団の上へと倒れ込



んでいた。

重なり合った身体。俺はゆつくりと手を伸ばし、その「自慢の果実」へと触れた。

「……………あつ……………!!」

浴衣の上から掌で包み込むと、千夜が短く声をあげて身をよじる。

「……………ふふ、好きですね……………。温泉でも、あんなに触ったのに……………まだ、足りませんか？」
「全然足りないよ。千夜が魅力的すぎるから」

「……………ずるい言葉。……………でも、嬉しい……………んっ……………」

俺の手が、浴衣の合わせ目から内側へと侵入する。露わになった白い谷間に、指を滑り込ませる。



「ひやつ……！ ちょ、直接は……だめ、刺激が……強すぎ……っ」

千夜は首を振り乱すが、胸を押し付けてくる。俺は彼女の望み通り、その豊満な乳房を直接、掌で鷲掴みにした。

「んあぁっ……！！ っっっ！」

千夜の口から、艶めかしい悲鳴が上がる。

「……はあ、はあ……っ。そこ、だめえ……。胸、壊れちゃいます……っ」

「壊れないよ。こんなに立派なんだから」

「……うう、意地悪……。でも……手、熱くて……胸の奥が、じんじんして……」

俺は親指で、硬く尖り始めている先端をこねるように刺激した。



「ひグツ……………ん、ああああ……………っ！そ、そこは……………っ！」

電流が走ったように、千夜の背中が弓なりに反る。

「……………変、になっちゃう……………。こうして弄られると……………私が私じゃなくなつて……………ただの、快楽を貪る獣に……………っ」

「それでもいいよ。千夜の全部を見せて」

「……………んっ、はい……………見て……………私の、全部……………」

千夜は震える手で、自ら浴衣の帯を解き始めた。浴衣の前が大きく開き、その豊満で美しい肢体が、完全に俺の目の前に晒された。

「……………どう、ですか？お風呂上がりで……………少し、火照っていますけど」

千夜が恥じらいと大胆さが入り混じった表情で、自身の身体を見せつける。

俺は吸い寄せられるように顔を寄せ、その先端に口付けた。

「ひゃあっ！……んっ、くう……っ！」

舌先で転がし、甘噛みする。

「あ……ん、んっ……！舌、ざらざらして……気持ちいい……っ。もっと、吸って……赤ちゃんみたい……強く……っ」

彼女の懇願に応え、俺は強く吸い上げる。ジュブ、チュブ、という淫らな水音が部屋に響く。片方の手はもう片方の胸を揉みしだき、口と手の両方で彼女を攻め立てる。

「ああっ、ああ……っ！すごい、すごい……っ！身体中が……溶けちゃう……っ！」

千夜が足をバタつかせ、シーツを握りしめる。

「……はあ、はあ……。……私を、どうする気ですか……。？」
「どうしてほしい？」

千夜はとろんとした瞳で俺を見つめ、紅潮した頬をさらに赤く染めて囁いた。

「……もう、『深淵への招待状』は……。發送済みですよ？」

それは彼女なりの、「最後までして」という合図だった。

「……中まで、来てください。……私の、一番深いところへ……。」

千夜が俺の首に腕を回し、身体を引き寄せる。その瞳には、もう理性のかけらもなく、ただ愛する男を求める情欲だけが揺らめいていた。



第四章…甘露満ちる聖杯と、母なる慈愛の儀式

「……あつ、んっ……！だ、め……そんなに、見つめられたら……」

乱れた浴衣の上から、露わになった白い双丘。俺の視線がそこに注がれるだけで、千夜の身体がビクンと小さく跳ねる。

「……もう、身体がおかしいんです。視線が触れるだけで……そこを、直接触られているみたいで……じわじわして……っ」

千夜は潤んだ瞳で訴えかけてくる。俺は彼女の期待に応えるように、ゆっくりと顔を近づけ、熱を持ったその先端に、這うように舌を伸ばした。

「……ひゃあっ……！！」



舌先でちょっと突いた瞬間、千夜の口から可愛らしい悲鳴が上がる。

「んっ、ああっ……！舌、熱い……っ！ざらざらして……電気が、走ったみたい……っ」
俺はそのまま、硬くなった突起を舌の腹で転がし、優しく、そして執拗に攻め立てた。

「ふあ……っ、あ……くう……っ！んんっ……！」

千夜の手が俺の髪を掴み、力が込められる。

「……すごい、です……。頭のとっぺんから、爪先まで……甘い痺れが駆け巡って……私の理性を、溶かして……」

彼女の呼吸は荒く、吐息には甘い熱が含まれている。

「……もっど。もっど、いじめて……。この『高ぶりすぎた紅の蕾（つばみ）』を……意地悪

な舌で、咲かせてください……っ

—————

「ん……ちゅ、ぶ……っ」

俺は攻め手を強めた。片方の手でもう片方の胸を揉みしだきながら、口に含んだ先端を強く吸い上げる。ジユブ、チュブ、という卑猥な音を立てて吸い付く。

「あぁっ、あぁ————っ！！」

千夜が大きく口を開け、声にならない声をあげる。

「吸っ、吸われてる……っ！強い、力が……っ！胸の奥のほうまで……引っ張られて……っ！」



俺の舌使いに合わせて、千夜の腰が浮き上がる。

「…………んああつ、はあ、はあ…………つ！まるで…………魂まで吸い出されているみたい…………。そこ、そんなに強く吸われたら…………私…………っ」

「…………変な汁が、出ちやいそうです…………。頭がトロトロになって…………身体の芯から、甘い蜜が…………溢れて…………」

俺は一度口を離し、唾液で濡れそぼったその頂を見つめた。

「…………ふふ。すごい顔、してますね…………そんなに、美味しかったですか？」

千夜は荒い息を整えながら、とろんとした瞳で微笑む。そして、魔女のような優しい手つきで、俺の頭を自身の胸へと誘導した。

「…………いいですよ。もっと、飲んで…………赤ちゃんみたいは、私の全てを貪って…………」



千夜が背中中のクツションに身を預け、上体を起こす。そして、その豊満な胸を両手で捧げ持ち、俺の顔の前に差し出した。

「さあ……『聖なる泉の開放』の儀式、です」

「お腹いっぱいになるまで……私を味わってくださいね？」

俺は導かれるまま、再びその柔らかな果実に吸い付いた。

「んっ……あ……よし、よし……」

千夜が俺の頭を優しく撫でる。俺が強く吸うたびに、彼女の喉から「んくっ……」「はあっ……」と甘い溜息が漏れる。

「…………ふふ。可愛い……。私の胸を、そんなに必死に求めてくれて……」

「…………ああ、んっ…………！強い…………っ。そんなに吸ったら…………本当に、ミルクが出ちゃうかも…………っ」

彼女の指が俺の髪に絡まり、後頭部を胸へと押し付ける。もっと深く、もっと強く吸ってほしいという無言の要求。

「…………ちゅ、ぶ…………じゅる…………っ」

「あ…………ん、んっ…………！そう、そこ…………。もっと、喉の奥を鳴らして…………私の『命の雫』を、飲み干して…………」

俺の舌が乳首を弾き、喉の奥で吸引すると、千夜は快感に耐えかねて身を震わせた。

「…………はあ、はあ…………っ。胸が、熱い…………。吸われるたびに…………お腹の奥がきゅんきゅんし



て……子宮が、疼いて……」

「……もう、だめ……。私……甘えん坊さんの、お母さんになっちゃいそう……。甘やかして、ドロドロに溶かして……この胸の中に、閉じ込めてしまいたい……。っ」

彼女は俺の顔を胸に埋めたまま、強く抱きしめる。

「……ふふ。いいえ、お母さんじゃありませんね。……私は、ただの『雌（おんな）』……」

千夜が耳元で、熱っぽい声で囁く。

「……おっぱいだけじゃ、足りないでしょう？ ……身体のもっと下のほうも……欲しがって、泣いていますよ？」

彼女の手が、ゆっくりりと下腹部へと伸びていく。甘い授乳の時間は、より深く、激しい愛の行為への序章に過ぎなかったのだ。

最終章…久遠（くおん）に刻まれし愛の契りと、朝焼けの微睡（まどろ）み

「……………つ、ああっ！んんっ……………！す、ごい……………っ！」

軋むベッドの音と、濡れた肌が打ち付け合う音。そして、千夜の口から溢れる甘く切ない喘ぎ声が、夜の部屋を支配していた。

深い口付けを繰り返しながら、俺たちは一つになっていた。彼女の温かく、締め付けるような『最奥の聖域』が、俺の全てを受け入れている。

「はあ、あつ……………！ん、ああ……………っ！深い、です……………っ！心の、一番奥底まで……………貫かれて……………っ！」

千夜が俺の背中に爪を立て、しがみついてくる。



「んっ、ちゅ…………っ！ 私も…………私も、お慕いしています…………っ！ もっと、もっと愛して…………壊れるくらい…………っ！」

俺は彼女の唇を塞ぎ、腰の動きを早める。

「んむ…………っ、あ…………！ 頭、おかしくなっちゃう…………っ。気持ちいい、気持ちいいです…………っ！ ……いっぱいになっ…………っ！」

千夜の瞳が潤み、焦点が定まらない。

「…………っ、もう、だめ…………っ！ 我慢、できません…………っ！」

千夜の声が裏返る。彼女の身体が弓なりに反り、足が俺の腰に強く絡みつく。

「俺も…………もう、限界だ…………っ！」

「…………いい、です…………。…………全てを…………私の魂に、刻み込んで…………っ！ 『生命の奔流（ほん

りゆう)』を……全部、注ぎ込んでください……っ！」

「んっ、ああっ……っ！ 熱い、熱いです……っ！ たくさん、来てる……っ！ お腹の中が……満たされて……っ！」

千夜はビクンビクンと痙攣しながら、その全てを受け止めようと、さらに強く俺を締め付けた。

—————

「……はあ……はあ……っ……」

「……んっ……ふう……」

嵐が去った後の静寂。俺たちは汗まみれのまま、重なり合って荒い呼吸を繰り返していた。ゆっくりと身体を離すと、千夜の秘所から、受け止めきれなかった愛の証がとろりと溢れ



出した。

「……ふふ。すごい量、でしたね……。私の中、たぶたぶです」

「ごめん、夢中になりすぎて……」

「謝らないでください。……嬉しいんです。……全部を、私が独り占めできたってことですから」

千夜は愛おしそうに俺の頬を撫で、優しくキスをしてきた。

「……気持ちよかった、です。繋がれて……。私、世界で一番幸せ者です」

「俺もだ。千夜が最高すぎて……。止まらなかった」

「……ふふ。また、そんなこと言って……。でも、そんなに夢中になってくれたことが、何よりの『ご褒美』です」

彼女は俺の胸に顔を埋め、幸せそうに目を閉じた。



翌朝。障子の隙間から差し込む柔らかな朝日で、俺は目を覚ました。

「……………」

俺の視線に気づいたのか、千夜がゆっくりと瞼を開ける。

「…………おはようございます。…………愛しい、旦那様」

「旦那様って…………まだ結婚してないぞ」

「ふふ。昨日の夜、あんなに深く契りを交わしたのですから…………心はもう、夫婦みたいなものでしょう?」

千夜はいたずらっぽく笑うと、布団の中で身を寄せてきた。

「…………ねえ。この旅行の締めくくりに、新しいメニュー名を思いつきました」



「え？今？」

「はい。昨夜の思い出をタイトルにするなら……『泡沫の夢を超えて、永久（とわ）に交わりし魂の回廊』……なんてどうでしょう？」

「長いよ。でも……千夜らしくていいな」

「ふふ、でしょう？……甘兎庵の新メニューにはできませんけど、二人だけの、秘密のメニューですね」

彼女はそう言って、俺の首に腕を回し、朝一番の甘いキスをねだってきた。

「……大好きですよ。……これからも、私の側で私を愛し続けてくださいね？」

その笑顔は、どんな絶景よりも美しく、俺の心を捕らえて離さなかった。

エピローグ…甘味処の帳（とばり）に隠された、二人だけの蜜事



「……いらつしやいませ。ふふ、今日は『漆黒の闇に堕ちた天使の涙』……いえ、あんみつがおすすめですよ?」

甘味処『甘兔庵』。旅行から戻って数日、いつものように看板娘として振る舞う千夜の姿があった。

「……あら。そんなところで立ち尽くして、どうされました?」

客足が引いた夕暮れ時。片付けをしていた千夜が、ふとこちらに気づいて微笑みかける。

「……少し、休憩しませんか? ちょうど今、誰もいませんし……」

彼女は俺の手首を掴むと、無言のまま店の奥——薄暗い倉庫の方へと引き寄せた。

「……んっ、ちゅ……っ」



振り返りざま、不意打ちのキス。甘い口付けが、俺の思考を瞬時に奪い去った。

「……はあ……んっ……。……我慢、できませんでした」

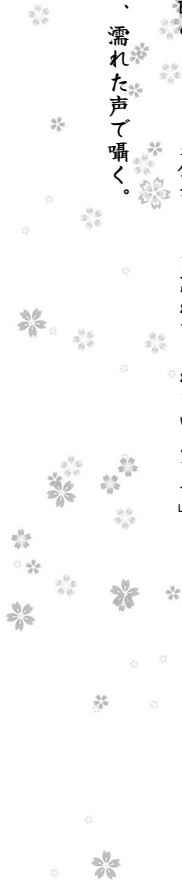
唇を離すと、千夜は潤んだ瞳で見上げてくる。

「お店に出ている間も……ずっと、想ってしまっ……。お盆を持つ手が震えるくらい……
身体が、疼いて……」

千夜が俺の手を取り、自分の帯の上——豊かな膨らみの下あたりに押し当てる。

「……旅行の時のこと……身体が、まだ忘れてくれないんです」

彼女が耳元で、濡れた声で囁く。



「……注がれた熱が……お腹の奥に残っているみたいで……。動くたびに、あの時の快感が蘇って……。下着が、ぐしょぐしょになってしまっ……」

俺の手は自然と着物の合わせ目から内側へと滑り込んだ。柔らかな素肌。そこは驚くほど熱く、そして湿っていた。

「……ひゃあっ……！ん、ああっ……！い、いきなり……そこは……っ！」

指先で敏感な突起を弾くと、千夜がビクンと身体を跳ねさせ、俺の肩に崩れ落ちる。

「んくっ……！はあ、ああ……っ！だめ、声が……お店に、聞こえちゃう……っ」

口ではそう言いながらも、千夜は俺の背中に腕を回し、さらに強く密着してくる。



「……もつと。もつと触って……。その手で……。私が『誰のもの』なのか、教えて……。っ」

千夜が懇願するように唇を寄せてくる。俺は彼女の要望に応え、着物を着崩さないギリギリの範囲で、その豊富な胸を揉みしだき、首筋に吸い付いた。

「んっ、あ……。っ！ ああっ……。っ！ すごい、指が……。肉に食い込んで……。っ！ んんーっ！」

彼女の膝がガクガクと震え、俺にしがみつく力が強くなる。

「……はあ、はあ……。っ。……。ずるいです……。こんな所（お店）で……。私を、発情させて……。っ」

「千夜が誘ったんだらう？」

「……。ふふ。そうですけど……。でも……。したかったくせに……。んっ、ちゅ……。っ」

千夜が背伸びをして、再び唇を塞いでくる。



「……………んむ……………あ……………ぶはっ……………。……………ねえ。今なら、誰も来ませんよ？」

千夜がとろんとした目で、悪戯っぽく、そして淫らに微笑む。

「……………こっそり、『秘密の味見』……………しちゃいますか？」

彼女の手が、俺のベルトへと伸びる。

「……………ここで？」

「はい。……………スリルがあつて、旅行の時よりも……………興奮しちゃうかも……………」

千夜は着物の裾をまくり上げ、白い太ももを露わにする。その内側は、すでに俺を受け入れる準備が整っていた。

「……………さあ。早く……………甘兎庵の裏メニュー……………『禁断の果实・白濁の蜜掛け』……………召し上

がれ……？」

薄暗い倉庫の中、衣擦れの音と、押し殺した甘い喘ぎ声だけが、いつまでも響き続けた。

く完く

